
俺の同級生がこんなに可愛いわけがない！

スケッチマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の同級生がこんなに可愛いわけがない！

【Nコード】

N7298Q

【作者名】

スケッチマン

【あらすじ】

俺の名前は藤崎亮平。自分で言うのもなんだがごく普通の中学生だ。

ある日。亮平に変な噂が???一体何？

第1話 最悪の朝

教室に向かうと。入口の前に女子が集まっていた。

「ちょっと失礼。」

と言って俺は教室に入った。

俺の名前は藤崎亮平。近くの中学へ通っている。自分で言うのもなんだが・・・ごく普通の中学3年生である。部活は入ってないし。勉強も人並みだ。とにかく普通なのである。

「ねえ。ザキフジ？」

近寄って来たのは高橋美咲だ。家が隣で小学生からずっと一緒の奴だ。ちなみにザキフジは俺のあだ名だ。

「ん？あんだ？」

道具を机に入れながら顔も上げずに言った

「あのさあ・・・ザキフジってホントに霧島さんの事好きじゃないの??」

その質問に俺は立ち上がり美咲をにらみながら言った

「好きじゃねえ〜!!! 誰があんな冷血女! 何回も言ってるだろ!!!」

ハアハア息をきらししてる俺に視線が集まる

「え・・・あ・・・わかった・・・ごめんね?」
そういつてまた女子の集団に戻って行った

「つたく・・・」

「おほ！？ザキフジい？どうしたんだあ？ため息なんかついて」
今度来たのは小村翔太だ。まあ一応親友だ。

「ほつとけ！てかお前いつから俺の事ザキフジって呼ぶようになったんだ？」

「だってみんな呼んでるから・・・ながれっす！」

「あ・・・そ」

俺はさらに深いため息をつく

「恋の悩みか？？まさか・・・例のあれか？」

翔太がニヤつきながら俺の顔を見る。

「違ええー！！！！お前もか！向こう行け！！」

席に着いて斜め前を見る。

霧島さきや・・・美人なんだけど他の女子となにか違う・・・授業以外しゃべっている所を見たことがない・・・そんな人を俺が好きという噂が出たのは1週間前の事である。原因は不明である・・・俺自身あいつに何かしたという覚えがない。こっちすればいい迷惑である・・・

<最悪の朝だ・・・>

これから最悪の日が続くとは俺は思いもしなかった。

第2話 下校

この日の授業はやけに早く感じた。まあ朝の事でイライラしてたしな・・

「・・・帰るか」

重い腰を上げると

「あつ！ザキフジ！一緒に帰ろ！」
美咲がやって来た

「おう。」

こうして俺は美咲と学校を出た。

「朝ごめんね？変な事聞いて・・・」

「あ？うん。別に気にしてねえから大丈夫。」
もちろんうそだ。言っておくけどめっちゃ気にしてたからね？

「そっか！じゃあ良かったあ・・・ザキフジ小学生からこついうの気にしてたから悪いと思ってたんだ。」

<知ってんなら最初から聞くなよ>

「ていうか。なんでそんな噂出たんだろうね？」

「知るか！こつちが聞きいわ！」

「ザキフジがなんかしたんじゃないの？」

「あほ！俺がそういう事すると思うか？」

「ん？？思わない！」

「ハア・・・」

「だ・大丈夫だよ！あと3日もすればみんな忘れてるよ！」

「そうだといいいけどな・・・」

「大丈夫！元気だそ！おおー！！！」

「・・・」

ため息をつく気にもなれなかった。

「ザキフジそういうところが駄目なんだよお！」

「あん？」

「こういう時は元気で吹き飛ばしちゃうの！！！」

「そういうもんか？」

「そうそう！じゃもう一度！元気出そう！おおー！！！」

「おおー！！！」

満面の笑みで言った。

「・・・ちよつと気持ち悪い・・・」

「自分でも思った・まあでも少し元気でたわ」

「ほんと良かった良かった！話してるうちに家着いちゃったね。それじゃ明日ね！」

「おう。明日な」

美咲と別れたあと少しあいつに感謝した。

「ただいまあ」

シーン・・・・・・・・

「あれ？母さんたち出かけてんのかな？？」

俺の家族は母さん・父さんと同じ中学に通う中1の妹がいる。

リビングに入るとテーブルの上に手紙と1000円札が置いてあった。

『亮平へ。お母さん達おばあちゃんの家言ってくるね！置いてあるお金で晩御飯たべて！』

「・・・しょうがね・・・飯買に行くか・・・」

こうして俺はコンビニへ向かった

第2話 下校（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

これからもがんばりますのでよろしくお願いします

第3話 コンビニ事件

外はもう雪すらないが風が冷たい。

「ううゝさつび．．」

と言いながら小走りでコンビニへ入る。

「ふう．．暖つけえゝ」

弁当売り場に向かうと。

「！！？！？！」

俺はお菓子売り場に身を隠した。弁当売り場で弁当を見ているのはなんと霧島さきやであった。

「．．．まじかよ．．」

いなくなるを待とうと思ったが一向に動く気配がない．．

「．．しゃあねえ．．牛カルビ弁当は．．

さつさと買って帰ろうと思った。が．．しかし

「げえゝ．．よりによって．．あいつのすぐ隣じゃん．．」

どうする？俺．．牛カルビ弁当を諦めて他のを買うか．．いや．．しかし．．」

悩んだ末

「よし！」

俺は1つ深呼吸をした。そして牛カルビ弁当のある。あいつの隣へ．．その時！！

「あつ」

さきやが俺を見た。

<うわあゝ・・・やべ・・・最悪だ・・・>

ビビった俺はその場を動けなかった。すると

「あ？お邪魔でした？」

と言って横に退けた。

「お・・・おう・・・サンキュー・・・」

俺は牛カルビ弁当を取ると足早にレジに向かった。

<あいつ・・・俺の顔忘れてんのか？？>

それにしても俺はビビった。なによりビビったのはあいつがしゃべった事だ。この後家に帰っても忘れられなかったね。

だが俺は知らなかった・・・この事件を見ていた奴がいたなんて・・・

第4話 誤解

俺が教室に入ると何故かみんなこっちを見ている・・・気のせいかな？？

「ザキフジ・・・やっぱりそうだったんだね・・・？」

美咲が女子の集団を引き連れてやってきた。

「な・・・何が？」

なんで俺おびえてんだ？？

「とぼけても無駄！」

美咲が言った

<はて・・・？俺なんかこいつらに怒られるような事したっけか・・・？>

腕を組みながら考えていると女子集団の中にいた南和葉が言った。

「昨日コンビニで霧島さんと一緒にいたんでしょ？」

「・・・え・・・？」

俺は死ぬほど動揺した。

<まさか・・・見られてたのか？・・・一体誰だ？>

「おほっ！？ザキフジ！問い詰められてんなあ！？」

翔太だ。

「ま・・・まさか・・・翔太・・・お前か・・・？」

ま・・・まさかね??こいつは俺の親友だ・・・んな事するわけが・・・

「当たたりいー!!!!」

「がががぁー!!!!ん!!!!」

「いやぁ・・・驚いたぜ・・・コンビニ行ったらお前とあいつが一緒に買い物してんだもんなぁ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「まさか付き合ってたとはねえ・・・」
女子がヒソヒソ話している。

「「違っげえー!!!!」!!!!」

俺は腹の底から叫んだ。

「あのなぁ！俺は昨日確かにコンビニ行っただけ。そんな時たまたまあいつがいたの!!!!で弁当買うとき偶然隣になったの!!!!」

「えっ!?!」

全員が言った

「ザキフジ・・・それ本当・・・?」
美咲が言った

「ああ・・・大々大本当だ!」

「そうだったの?・・・」
女子の視線が翔太に刺さる。

「小村あ・・・!?!」

美咲の目が変わった。怖ええ・・・こいつこんなだったけ・

「・・・ごめん!!」

と言って翔太は逃げた。それを追うように女子も走って行った。

「ハア・・・」

まあこうしてこの事件に関しては簡単に収まった・・・これで済むといいけど・・・

そして授業が終わり職員に行っていた俺はみんなより遅れて学校を出た。

「ああ・・・帰って何すっかなあ・・・」

と大きな独り言を言っていると倉庫の裏から声が聞こえた。

「おいおいたったこれっぽっちかよお!?!」

見てみると高校っぽい男女が6・7人いた。

「もう今月は・・・お金がなくて・・・」

どこかで聞いたことのある声がした。

「ん?」

もう一度そつと覗いて見た。するとそこにいたのは!?!?

第5話 倉庫裏事件！そして・

ここは学校近くの倉庫の裏だ。俺はそこで目を疑った。

「なっ・・・なんであいつが・・・」

そこにいたのは霧島さきやだった。

「はあ！？金がねえってどういう事だよお！？？」
集団のボスみたいな男が言った。

「じゃ・・・じゃあ明日今日の分と一緒に持ってきますから・・・」
さきやは下を向いたまま小声で言った。

「はあ！？聞こえねえよ！？」

「・・・・・・・・・・」

「なんか言えやー！」

「う・・・うつ・・・」

さきやの頬に流れたのが見えた。

「おい何泣いてんだよお！？」

と言ってそいつはさきやに手を伸ばした。その時俺は何も考えずに
そいつの手を掴んだ。

「やめろ・・・」

俺はさきやの前に入って言った。

「・・・あ・・・君は・・・」

さきやが涙を流しながら言った。

「なんだてめえ!？」

やべ・・・怖っえ・・・

「こいつのクラスメイトだ・・・これ以上こいつに関わるのはやめろ
!!!」

俺は大声で言った。

「ああ!？誰に言っただてめえ!？」

「お前に言っただ!」

不良はその一言でできた。

「・・・ざけんなよお!？」

と言った殴りかかって来た。俺は喧嘩はしなくなかったからさきや
の手を掴んで全力で走った。

「はあ・・・はあ・・・」

路地を匠に使いなんとか逃げ切れたようだ。

「はあ・・・はあ・・・」

俺もさきやもおそらくこんなに走ったのは久々だろう。

「だ・・・大丈夫か？」
一息ついて言った。

「うん．．あの．．その．．」

「なんだ？」

「どうして助けてくれたの？」

さきやが下を向きながら言った。

「だってよ。金取られそうになってだろ？」

「．．．」

「何あつたんだ？話してみ？」

こんなの俺のキャラじゃないがたまにはこういうカッコいいこともすんだけ。

「私．．小さい頃からあまり人と接するのが得意じゃなくて．．中学入っても全然友達出来なくて．．うっ．．」

歩きながら言っていたさきやの頬にまた涙が流れた。

「お．．おい！泣くなよ！」

どうしていいかわからなくオロオロする俺．．

「それに今日だって藤崎君と私が買い物してたって．．．私．．それは誤解だよって言えなくて．．藤崎君に迷惑かけて．．ごめんなさい．．」

と俺に頭を下げた。

「いいって！もう済んだ事だし．．謝んなって！」

そして一つ息を吸って．．俺はそいつに言った

「人間誰でも・一つや二つ欠点があつてあたりめえなんだよ。だから気にしない方がいいと思うぜ!？」

「やさしいね・藤崎君・」

「な!？・んまあ・今日の事もあつて危ねえから・・・・なんかあつたら・俺に言えよ・」

俺・カッコいい事言つたと自分で思つた・

「・・・ありがとう・じゃあ私家こつちだから・じゃあね・

」

「おう!また明日な」

と言つとさきやは驚いた顔を見せ・

「うん!また・明日・」

と言つて歩いて行つた。するとまた振り向いた。

「ん？」

俺が見ていると。さきやは恥ずかしそうに

「・・・ほんとありがとね・藤崎君・」

と言つて走つて行つた。

俺はこの時幾分顔が赤かつたかもしれない・そしてこう思つた・

俺の同級生がこんなに可愛いわけがない! ってな。

第6話 自分の思い

俺はある心配をしながら学校へ向かった。何かって？そりゃあ昨日の事を誰かに見られてないかだよ・・・だがその心配はいらなかった。

「おはよぉーっす！」

「おっ！ザキフジ！おはよぉー！」

俺が教室に入ると男子も女子も普通だった。しかし普通じゃない事が1つあった。

「おはよう！藤崎君！」

なんと女子の集団にさきやがいたのだ。

「お・・・おう・・・おはよう」

「さきやちゃんもザキフジって呼べばいいのにー！」

美咲が言った。おいおい・・・お前いつからさきやちゃんって呼ぶようになったんだよ・・・

俺が席につくと翔太がきた。

「おい！ザキフジ。お前あいつに何したんだよ！」

「何ってなんだよ？」

「見ろよ！？なんであいつが普通に女子と話してんだ？」

「俺が知ったこっちゃねーだろ！？」

「だってよお前・・・」

と言いかけた翔太を俺はにらみつけた。

「・・・だ・・・だよな・・・まっ俺らにはカンケーねーしな・・・」
勝った！俺は思った。

学校が終わり教室を出ようとすると

「ザキフジ！一緒に帰ろ！」

美咲がやって来た。

「おう。」

こうして俺は美咲と学校を出た。

「ううゝ・・・寒いねゝ」

美咲が自動販売機の前で言う

「わざとらしいんだよ・・・」

「ダメ・・・？」

と上目使いで俺を見てくる・・・俺こっぴうの弱いんだよなあ・・・

「・・・しょうがねーな・・・」

としぶしぶOKする俺・・・

「やった！コーヒーね！」

「へーへー・・・」

と2人でコーヒーを飲みながら歩いていると

「今日さきやちゃん話してたじゃん？」

「ああ・・・」

「昨日さきやちゃんが不良にからまれてるところ助けたんでしょ？」

「ぶっ！！・・・なんで知ってたんだよ！！」

「だってさきやちゃん言ってたもん！」

「あの野郎・・・」

「でね。その後ザキフジと話して変わろうって思ったんだって！」

「ふーん」

「なんて言っただの？」

「な・・・なんでお前に言わなくちゃダメなんだよ！？」

「気になるじゃん！」

「気にすんな！」

「やあー！！・・・でもさきやちゃん・・・ザキフジ事ばっか話してたよ？」

「あっそ・・・」

まあちよっとうれしい気もあるけど・・・そんな事を真顔で考えて

いると

「あれれ??もしかして本当にさきやちゃんの事好きになっちゃった??」

「ブツーーーー!!!!!!」

俺は口に含んだコーヒーすべてを出した。

「キャ!きたない!!」

「ゲホッ!!おま・・・お前が変な事言うからだろが!」

「・・・・・・」

「ん?なした?」

「ん!なんでもないよ!じゃあね!」

「おう。」

美咲と別れ1人で歩いているとふと考えてしまう・・・

あの事があつてから何故かあいつを意識してしまう・・・なんでだろ??特になんも思っていないのにあいつを見るとなんか緊張しちまう・・・これって・・・もしかして・・・俺ほんとにあいつの事好きになっちまったのか??

第7話 デート！？（前書き）

更新遅れてすみません・・

受験とかあつてなかなか更新できなくて・・

第7話 デート!?

今日は日曜日

俺はベットの上で寝転んでいた。

ありがとね。藤崎君・

「ああー！ー！ー！ー！」

なんだこの気持ち・・今までにねーぞ？こんな事

「クソ！ー！」

と枕を叩く

まさかほんとに俺あいつの事・

「あゝ！ー！認めねー！ー！ぜってー認めねー！」

「何叫んでるの？」

妹の綾香が部屋に入ってきた

「わっ！綾香！ノックしろよ！」

「あーごめんごめん」

投げやりな謝り方だ。

「で。なんだよ？」

「クッキー焼いたら焦げちゃったから食べて！」

と綾香は真っ黒のクッキーを出した。

「・・・これクッキーか？」

「一応ね！じゃよろしくね」
と部屋を出て行った。

「はぁー・・・」

その時携帯のバイブレーションが鳴った。

「ん？」

見たこともないアドレスだった。

「誰だ？」

メールを見ると・・・

藤崎君。誰かわかりますか？霧島さきやです。

「！！？？なんで俺のアド知ってんの！？」

と言いつつも続きを見る。

突然すみません・・・

ところで今お暇ですか？？

もしそうでしたら・・・一緒にお買い物行きませんか？？

・・・メール読み終えた俺・・・

これって・・・デートの誘い！？しかも相手はさきや！？どつする・・・

俺は時計を見る。午前10時・・・これから特にやることもない・・・まー別に付き合ってるわけじゃないから・・・いいか・・・

と思った俺はメールを返信した。

いいよ。どこに行けばいい？

するとすぐ返信が来た。

ありがとう！じゃあ2丁目の公園で！

「あゝOKしちゃった・・・」

なんか返信してからあわて始めた俺・・・

「やべ・・・なに着ていこう・・・」

と考える考える・・・今一番気に入ってる服を着て俺は家を出た。

第8話 デート？

俺は家の陰から公園の方を見るとベンチに座っているさきやがいた。

俺はひとつ深呼吸をし

「よっ！」

とさきやに話かけた。

「あっ！藤崎君！」

とさきやがこっちを見て立ち上がった。

「つつ！！？」

俺は息を飲んだ。

な・・・なんだ・・・こいつ・・・めっちゃ可愛いじゃん・・・髪型も整ってるしいつもの10倍は美人化してるぞ！？

「どうしたの？？」

口を開けている俺にさきやが尋ねた。

「あ・・・いや・・・いつもと雰囲気違うなと思って・・・」
というとさきやは照れながら

「えへへ・・・そかな？？」
と言った。

なんだよこいつ！？めっちゃ可愛いじゃん！こないだまでの大人しいさきやはどこに行った！？

「じゃ。いこ!？」

「お・・・おう」

と2人で並んで歩き始めた。

「急にごめんね。迷惑じゃなかった？」

「いや。暇だったしな。というかお前なんで俺のアドレス知ってた?」

「和葉ちゃんに貰ったんだ!」

「ああ・・・和葉か・・・」

「つてかあいつ俺のアドレス知ってたっけ?俺のアドレスはどこから流出されてんだ?」

「そうだ。買い物って言ってたけど何買うんだ?」

「洋服とかあとはちょっと藤崎君に選んでもらおうかなって・・・」

「俺に??」

「うん!」

「何買うの?」

「まだ秘密!」

「じゃあ楽しみにしておくよ。」

話しているうちに人通りの多い所に出た。

今俺らはどう見えてるんだろう??おそらく絶対カップルに見えるだろうな・・・

デパートの前に着くと

「なんか緊張してきたな・・・」
さきやが言った

「なんで?」

「だって男の子と2人でデパートなんて入ったことないから・・・」

「別に緊張することじゃねーだろ?」
まあ俺は別の意味で緊張してるけど。

「う・・・うん・・・じゃあいこ。」

デパートの中にはいると

「藤崎君はこういってこの女子と来たことあるの?」

「美咲と何回か来たことあるけど・・・」

「美咲ちゃんと藤崎君って仲いいよね。」

「そうかあ?」

「うん!すごい仲良く見える!」

「まあ小学校から一緒だったからな・・腐れ縁ってやつかな」

「ふーん・・」

服売り場に着いた。俺は女子が服を買うときは時間がかかるとばかり思っていたが・・

「じゃあこれとこれとこれ！」

とさきやは10分もしないうちに服を決めて買ってしまった。早くねーか??美咲なんて2時間はかかってたぞ?

「服決めるの早いね・・」

「そうかな?いつもこんな感じだけど・・」

つてことは美咲はバカってことか・・

「で次は何買うんだ？」

「うんとね・・藤崎君の今ほしいものって何？」

「俺のほしいもの？」

以外な事を聞かれたので声が裏返ってしまった。

「うん！」

「特にねーな・・」

「え!??・・ないの!??」

「うん・・・」

「じゃあ男の子から見ても貰ってうれしいものとか何？」

「うれしいものか・・・」

「なんだろう？男が貰ってうれしいものって・・・」

「うーん・・・その人の気持ちが詰まっていれば誰でもうれしいと思うけど・・・」

「気持ち・・・」

「うん！わかった！ちよつと待ってて！
とさきやは走っていった。

これってもしかて・・・俺に？？いやいやそんなことはないだろ！！
でも・・・俺にほしいもの聞くってことは・・・

考えてるうちに袋を持ったさきやが来た。

「じゃー！いこー！」

期待した俺がばかだった・・・

デパートをでると

「今日は付き合ってくれてありがとう。」

「いやいや・・・」

「私これから寄るところあるからまた明日ね！」

「おう・・・明日！」

こうして俺のデートは終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7298q/>

俺の同級生がこんなに可愛いわけがない！

2011年3月18日10時42分発行